



木がどうなりたいかを読み取る、大川の匠。

職人たちが腕を競う風土の中で育まれたもの

家具の大産地として知られている大川。この地で300年以上前に生まれた大川組子は、釘を使わずに木と木を組み付けて作る建具の技法のひとつ。この技法を使って細工を施したのが大川組子です。木工職人が腕を競う環境にあるなか、建具の装飾として自然派生的に誕生。その図柄の種類は数百以上にもなるといわれています。大川組子特有の複雑な幾何学文様が、光を通して映し出されると、まさに陰翳礼讃ともいふべき、日本古来の伝統的な芸術性を感じさせてくれます。



光と影が美しい大川組子の照明

木工職人

木下久馬人(木下建具)



福岡県大川市

vol.5

室町時代から続く木工職人の歴史

木工の街、大川の歴史はさかのぼること約470年前。室町幕府十二代将軍・足利義晴の家臣、榎津遠江守の弟として生まれた榎津久米之介が、家臣に商工を営ませたことに始まると言われています。そして中興の祖となったのが田ノ上嘉作。嘉作は、釘を使わず、木に穴や切り込みを入れ組み合わせさせた榎津指物を作りだしました。

昔の旧家の家並みが数多く残されている小保・榎津地区の旧吉原家住宅では、榎津指物の技術力を応用し、木の節目をくりぬき、縁起をかつぎ桃をあしらった意匠が施されており、当時の木工職人の遊び心を見る事ができます。



大川木工の祖・榎津久米之介像



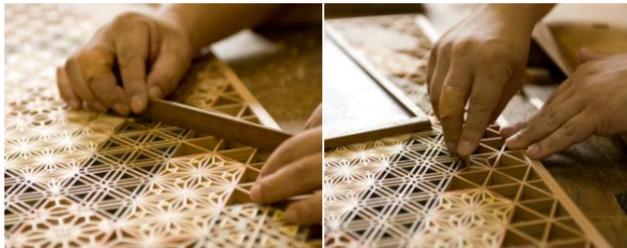
旧吉原家住宅 縁起をかつぎ桃をあしらった意匠

組子細工は、精密さが要求される手仕事

「機械による作業は容易にまねできるが、身につけた技術は決してまねできない、だから手仕事を大事にしていきたい」と、木工職人の木下さんは話す。組子は、細かくひき割った木に溝・穴・ホゾ加工を施し、鉋やノコギリ、ノミ等で調整しながら一本一本組み付けしていく、精密さが要求される手仕事。また、木が本来持っている木目模様、色合いが、いかに調和し均整がとれているかといった高度なデザイン感覚がないと製品にならない。組子に精通した職人になるためには、途方もない時間と情熱が必要とされます。



組子の木片のパーツ。着色はしないで木の自然の色合いを活かす



ちゃんとしてないとつまらん

いつでも動きだせるように準備しておくというのが師匠の教え。道具の手入れについては、とにかく厳しかったとのこと。



長い時間をかけて繰り返されてきた木との対話

木と向き合う木下さんが印象的だった。木を優しく扱いつつ、静かに語りかけるような雰囲気。木下さんの木工に対する日々の思いとは、「日々精進、毎日が勉強であり、常に新しいことに挑戦する」という。15歳からこの道を歩んできた木下さん。謙虚な姿勢を忘れることなく、今もなお、新しい作品づくりに挑戦し続けている。



後継者の育成がこれからの課題

長い歳月で培ってきた高い技術力を評価され、大川で4人目となる卓越技能者「大川の匠」に認定された木下さん。通常、匠の技は師弟の関係をもって継承されることが多いが、次代を担う後継者を育てるためにはもっと裾野を広げる必要があると考えられています。木下さん自身も後進育成の指導を積極的におこない、継承向上の発展に寄与しています。



木で作れるものだったら何でも作ろうと思っている

木で作られてはいるが、どこか近未来を思わせる前衛的なこの作品は、虫かご！木下さんは組子の技術を応用して、様々な建具装飾を考案している。「木で作れるもんやったら、なんでも作る」という木下さん。聞くとところによると上部のかたちは切ったスイカをモチーフにしているとのこと(笑) この虫かごに鈴虫を飼って過ごす夏は最高に風流だ！



地域催事のスタンプラリー賞品にもなっている虫かご。大川の子どもたちが実にうらやましい。

これからも街と共存していく職人たち

10月から12月にかけて家具・建具の注文が多いとのこと。それは10月に「大川木工まつり」という大きな展示販売イベントがあるのが理由のひとつ。このイベントが職人と消費者との直接的な接点にもなっているから。職人たちが腕を競い合う風土があるからこそ、その切磋琢磨がお互いの技術力の向上につながっていくもの。木工職人にとって大川は大切な場所であり、思い入れのある街であることがわかります。

